

「飴だま」

新美南吉

春のあたたかい日のこと、渡し舟に二人の小さな子どもをつれた女の旅人がのりました。

舟が出ようとすると、

「おおい、ちよつとまってくれ。」

と、どての向こうから手をふりながら、さむらいが一人走ってきて、舟にとびこみました。

舟は出ました。

さむらいは舟のまん中にどっかりすわっていました。ほかほかあたたかいので、そのうちにいねむりを始めました。

黒いひげをはやして、強そうなさむらいが、こつくりこつくりするので、子どもたちはおかしくて、ふふふと笑いました。

お母さんは口に指をあてて、

「だまっておいで。」

といいました。さむらいが怒ってはたいへんだからです。

子どもたちはだまりました。

しばらくすると一人の子どもが、

「かあちゃん、飴だまちょうだい。」

と手をさしました。

すると、もうひとりの子どもも、

「かあちゃん、あたしにも。」

といいました。

お母さんはふところから、紙のふくろをとりだしました。ところが、飴だまはもう一つしかありませんでした。

「あたしにちょうだい。」

「あたしにちょうだい。」

二人の子どもは、りようほうからせがみました。飴だまは一つしかないのです、お母さんはこまってしまいました。

「いい子たちだから待っておいで、向こうへついたら買ってあげるからね。」

といっけかせても、子どもたちは、ちょうだいよオ、ちょうだいよオ、とだだをこねました。

いねむりをしていたはずのさむらいは、ぱっちり眼をあけて、子どもたちがせがむのを見ていました。

お母さんはおどろきました。いねむりをじやまされたので、このおさむらいは怒っているのにちがいない、と思いました。

「おとなしくしておいで。」

と、お母さんは子どもたちをなだめました。

けれど子どもたちはききませんでした。

するとさむらいが、すらりと刀をぬいて、お母さんと子どもたちのまえにやってきました。

お母さんはまっさおになつて、子どもたちをかばいました。いねむりのじやまをした子どもたちを、さむらいがきりころすと思ったのです。

「飴だまを出せ。」

とさむらいはいいました。

お母さんはおそるおそる飴だまをさしだしました。

さむらいはそれを舟のへりにのせ、刀でばちんと二つにわりました。

そして、

「そおれ。」

とふたりの子どもにわけてやりました。

それから、またもとのところにかえつて、こっくろこっくろねむりはじめました。